
light and cat 【MH 3】

猫猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

light and cat【MH3】

【Nコード】

N0670R

【作者名】

猫猫

【あらすじ】

大型モンスターを一体も倒せないライトは、ある日生意気なアイリと組むことになる。しかしこのアイリ、なにやらわけありの様子。

異常発生の多発する狩場。必要以上に傷つけられているモンスターの亡骸。何かを隠している様子の半人アイリホルム。狩りはもちろん、しかし狩り以外も重点的に語られる。

落ちこぼれのライトは果たして不名誉な呼び名を返上できるのか!?

別に特段グロエロないですから年齢制限はつきませんが、本家であるモンハン様のcerro判定を参考にしていただけると幸いです。それぐらいの血は…飛びます。

おちこぼれの血統

月明かりに照らされる中、一人の青年が立ち上がった。

黒い髪を肩まで垂らした青年で、黄金色の双眸をしている。その耳のあるべき場所は髪に隠れてみえないが、おそらくそこに耳は存在しない。

彼の頭の上には逆三角の耳…つまり猫のような黒い耳がひょこんと飛び出している。

ぴくぴくと時折動かため、つけているものではないようだ。

「…つたく、面倒なことになった…にゃ」

かわいい語尾がついてしまうが、それは決して彼の意思ではない。苛々と頭を掻いてから大きなあくびをした。

溪流と呼ばれる場所…楓の葉が彼の頭に一つ引っかかっていた。

「あーもうっとうして私にはこんなに才能がないのっ！」

一人の女ハンターが頭を抱えてギルドの机に頭をぶつけた。その鈍い音と悲鳴がギルド全体に響き渡り、狩りを終えて休息をとっていたハンター達がまたあいつか…と爆笑する。

未だに少女とも呼べる年齢のハンターだ。赤い髪をツインテールにしているが、長さはそこまであるわけではなく、肩の付近で揺れている。紫色の瞳は明るさをたたえており、彼女の性格を表しているようだ。

ユクモ村のギルドはいつだって賑やかだ。彼女の身にまとう武具は全て当初ハンターに支給されるユクモの武具。見た目は和風でかっこいいのだが、防御力に関しては少々心もとないものだった。

周囲にいるハンターはほとんどが大型モンスターの鎧を身にまとっている。その中で初期装備の彼女は目立っていて、なおかつからかわれる対象であった。

「笑うなあ！」

「ライト、お前またクエストミスったんだってな。今度は何の討伐だっただあ？」

ギルドないに並ぶ多くの机、その中でもとりわけ豪華な皿の並ぶ席の真ん中に座っていた大男が尋ねる。ライトと呼ばれた少女はきつと大男を睨み付けた。

その威勢のよさが更にからかわれる。

もともとハンターになる女は少ない上に、男より力で劣る女のハンターが高名になることは少ない。故に馬鹿にされることが多いのだが、その中でもライトは飛びぬけて馬鹿にされやすい立ち位置だった。

「バルガ！次私のこと馬鹿にしたら、ぶっ殺す！」

「ぶっ殺すだつてよ？」

大男、バルガが笑いながら仲間のハンターに問いかけると、ゲラゲラと嫌な笑い声がギルドを支配する。

そのやり取りを見ていたハンターが、共にクエストを果たしたハンターに話しかけた。

「ライトもよくハンターが続くよな。あいつには才能ねーよ」

「未だに大型モンスターが倒せないんだろ？…バルガと同期らしいが、あの格差はなあ」

二人のハンターがそう噂するのも無理はない。バルガの身にまわっている防具はリオレウス…空の王者と呼ばれるモンスターのものだ。同じ時期にハンターとしてデビューしたはずの二人のこの格差。それを見れば誰だつてライトに才能がない…と言うだろう。

バルガの周囲にはすでに三人のハンターがいて、常にその四人でグループを組んで狩りに出かけているようだった。別に珍しいことではない。

ハンター同士でグループを組み狩りに行く。それはギルドも認めていることであり、かなりのハンターがその方法をとっていることも事実だった。

だがそれは狩りに行く対象のモンスターが強敵な場合だ。

初期の大型モンスター…つまりはドスファンゴやアオアシラ程度ならば、一人で狩れて一人前。しかしライトはそれが出来ていない。

「絶対見返してやる…後から泣いて謝罪させてやる！」

「お前にそれが出来るならな…まずは大型モンスターを倒してから言うんだな！」

「う…馬鹿バルガ！」

勢いで悪口をはき、そのままの勢いで受付のクエストを受ける。内容の確認は適当にしかしなかったが、討伐対象はアオアシラだ。

「今からお望みどおりアオアシラ狩ってきてやる！成功したら私を馬鹿にするのを止めなさいよ！」

「おうおう、死なないうようにな」

「アオアシラで死んだら笑い話にされっぞ」

数人のハンターのからかいの声を背中に受けながら、足音荒くライトはギルドを飛び出していった。

そんなやり取りをギルドの端の席に座っていた二名の男女が見ていた。

片方は隻眼の男。茶色の長い髪をオールバックにして結んでいる。

もう片方は赤い髪をした妖艶な女性で、胸元の大きく開いた格好をしていた。隻眼のほうはハンターであるらしく、身には他のハンター達とは異色の青色の防具を身につけていた。兜は脱いでいる。

女のほうはどうやらハンターではないのか、防具ではなく普通の服を身にまとっている。

長い赤髪は腰まで垂れ下がっており、脚を組んで酒を飲んでいた。

「ルツジ…あの子、また無茶を」

「クエストに失敗して帰ったばかりだというのに…お前の子は、本当に無茶をする」

「あら、そんなあの子の性格を知っているくせにあの子にハンターを進めたのはあなたよ？それに、あの子が誰に似たのかなんて…わかってるくせに」

「ルフエア…俺と旦那のせいにするなよ。一番お前に似てるぞ、ライトは」

「そうかしら？」

くすくすと笑ってルフエアと呼ばれた女性は脚を組み替えた。その仕草は異性をとりこにする何かを持っている。周辺のハンター達の視線を集めていることに気づきながらも、ルフエアは微笑むばかりだ。

そんな親友の妻の姿を見て、ルツジはため息をついた。

「あら、ご高名の隻眼ハンター、ルツジさんがため息？ユクモ村で一番なんだから、少しは自負を持って頂戴？」

「俺が一番？…冗談だろ。一番はお前の旦那だ」

そう言ってルツジは天井付近を仰いだ。ギルドの受付…その壁の上部に額縁に入れられたハンターの写真が飾られている。

ユクモ村のギルドの中でも飛びぬけた才能を持ち、他のギルドにも名をとどろかせていたハンター…モリス。彼の姿がギルドから消えてから十年が経とうとしている。

「もう…十年か」

「感慨深くないでよ、辛気臭いわ。私は今だってあの人が生きてるって信じてるし、きつとライトも…」

「わかってるよ」

ルフエアは目を細めて写真を仰いだ。緑がかった髪をした男の姿がそこにはある。

「誰かあの子と組んでくれたらいいんだけどね…私たちの気苦労もそれで減るわ」

「まあ…あそこまで孤立すると、なかなか組んでくれるやつもないだろうな。俺が組んでやってもいいんだけど」

「それだとあの子、もっと孤立しちゃうでしょ」

「そうなんだよなあ」

どうしたものか…と二人は頭を悩ませていた。

生意気なアイルー

早速溪流にやってきたのはいいのだが、すでに太陽の沈みそうな時間帯、モンスターが寝ている可能性もあるのだが、相手が夜行性だった場合、こちらの視界が悪い上に相手の動きは俊敏…という最悪な環境下におかれることになってしまう。

ライトはいまさらながらに自分の軽率な行動を後悔したのだが、すでに遅い。

今から戻ること可能なのだが、何も出来ずに逃げ帰ってきたライトを見てバルガ達がなんと…うか…は目に見えている。

ぎゅっと太刀の柄を握り締めた。

「行くしかないよ…大丈夫、私はいける！」

自分に言い聞かせる。ユクモの太刀を握り締めて走り出した。

ガーグアが数匹眠っていた。敵の気配に敏感な彼らが逃げ出していないということはつまり、近くに大型モンスターはいないということだ。

張り詰めていた緊張を解き、ふう…と息を吐いた。

一度携帯食料を口に含み、その味気なさに眉をしかめる。

太刀を鞘に戻し、すたすたと歩き出した。小川のアたりにまで移動すると、近くにあった岩に腰を下ろして一度休むことにした。

もともと体力があるほうではない。ハンターの適性がないことなど、自分が一番よく知っていた。

「どうして私、ハンターなんてやってんだらう？」

つい口をついて出た言葉…自分の言葉でありながら自分で驚いた。核心をつく言葉だったからだ。

楽しい…なんて感じたことなどない。

辛だけの仕事だった。

バルガ達が狩りを終えた後、笑いながら満足げな表情で宴をしている姿を何度も目にした。そのたびに強い劣等感と嫉妬…それに悲し

みを覚えていた。

どうして笑顔でいられるのだろう？

自分にとって狩りは死ぬかもしれない…という恐怖の時間でしかない。ハンターという仕事に生きがいを感じることができていなかった。

「ルツジさんと母さんに進められたからやってみたけど…正直私には才能、ないよ」

それでも今まで止めずにきたのは、彼女の性格：負けず嫌いのせいだろう。

バルガに負けてたまるか：ハンターを辞めたことで、臆病者と罵られるのが嫌だった。だからこそ今まで続けてこれた。

だがそれも…そろそろ限界だった。

夕暮れ：橙色の光に照らされる自然、それは好きだった。溪流にはよく狩りに来ている。だからこの光景は好きだったし見慣れてもいた。

紅葉の葉が川を流れていく。ハンターではない民間人は危険なため、単独で立ち入ることをギルドから禁じられている場所だった。

ハンターになってよかったことといえば、規制箇所への立ち入りが許可されたことくらいしかない。といってもライトはハンターランクが低いため、そこまで多くの場所に立ち入れたわけではないのだが。

そんなことをぼんやりと考えていたせいで気づくのが遅れた。

影が落ちたかと思えば、体は勝手に横に転がっていた。身に染み付いた経験というやつだ。

先ほどまで自分が座っていた岩が砕ける。

その強靱な爪を振りかざして吼えたのは、青い巨大な熊…アオアシラだ。

「うそっ…こんな場所に！」

完全に不意をつかれてしまった。太刀を抜くが、自分の手が震えていることに気づく。恐怖だ。

「ゴオオオオオオ!!!」
低いアオアシラの声が響く。動きに隙が多いモンスターではあるが、その爪の餌食になってしまえばダメージは免れない。慎重に距離を測って、ぎりぎり爪が届かない場所へと体を投げ出す。
赤い眼と眼が合った。

体がすくみ上がる。人間など貧弱な存在に過ぎない。自然の大きさに魂から震えた。

だが自分はハンターだ。こんなところで怯えている暇はない。

「っ…やああああ!!!」

叫びを上げながら太刀を振り上げ、攻撃をはずしたことによってふらついているアオアシラの広い背中を切りつける。硬い感触…皮膚を貫くために勢いを殺さずに精一杯の力を込める。

アオアシラの皮膚は装甲に覆われているわけでもなく、かなりやわらかい部類に入るのだが、それでもライトの太刀は僅かに肉を切り裂いただけで、深くへとは入らずに浅い傷を残した。

中途半端な攻撃は、相手の怒りをかうだけだ。

僅かに血が流れ、アオアシラは痛みに吼え、怒りの瞳をライトに向けた。

「ひっ」

悲鳴を上げるが体は勝手に動く。アオアシラの攻撃を転がることで何とか避けた。

勝手に動く体…その行動に何度命を救われてきたか。何かの経験のおかげ？才能？

そんなことを考えている暇はない。

一度下がり、太刀を構えなおすと今度はその横腹に突き刺した。

「やああ！」

切り付けたときは違う確かな手ごたえ…太刀はその切っ先を熊の横腹に食い込ませると、そのまま滑るように体内へと貫いていく。

今度の悲鳴は痛みの悲鳴だった。ライトは太刀を引き抜くと脚を肩幅、そして前後になるように配置する。腰を落とし、瞳ではアオア

シラを見据え：胸は横に向くようにした。

その状態で太刀を引き、胸の前に刃が通るようになる。

柄の先端に右掌を当て、左手で柄を持つ。その状態で停止した。

本当は怖くてたまらないというのに、なぜかその格好が思いついたのだ。

「グオオオオツ！！！」

怒り狂ったアオアシラが突っ込んでくる。両手を前に突き出し、鋭い爪をこちらに向けていた。

避けることはせず、体を僅かに動かすことで爪が肩の上を通るようにする。接近した：触れられるほどに。

相手が近づいてきたため、構えていた太刀の切っ先が相手の腹に突き刺さった。力など必要ない。相手が勝手に刺さってくれるのだから、こちらはそれを受け止めればいいだけだ。

「行つけええええええ！！！」

根元に近い部分まで刃が埋まった。血が噴き出す。相手が小型のモンスターならばこれで終わりなのだが、今回は相手が違った。

大型モンスターの体力は予想以上で、太刀に貫かれたまま体を引いたのだ。押されることには対処していたが引かれることなど微塵も考えていなかったライトは、抵抗も出来ずに太刀を手放してしまう。つまりは武器を奪われたのだ。

串刺しになった状態でも生きていることに愕然とした。

「グオオオオオオオオオ！！！」

太い右腕が振り上げられる。もう駄目だ：そう思ってきつく目を閉じた。

誰だって自分の死に際の光景など見たくない。

「酷い太刀の使い方だにゃ」

全ての終わりを覚悟した瞬間、低い声が聞こえた。

かっこいいともいえる声：声に反応してライトが眼を開けると、そこには黒い猫がいた。

メラルーか？：と一瞬危惧したが、どうやら彼は人間に友好的なア

イルーのようだ。

黒い毛色のイルーなら見たことはあったが、そのイルーの毛色は真っ黒というわけでもなく、僅かに紫色の混じった…まるで夜闇の色。

見間違いだろうか？イルーがスラツシユアックスを手に使っていたなんてありえない。

自分の何倍もある大きさのスラツシユアックスを…黒い羽の使われたスラツシユアックスを軽々と持ち、それをアオアシラの頭から突き落としたのだ。

「グオオオツオオオオ！！！！」

貫かれたアオアシラが轟音を立てて地面に倒れこむ。

それからしばらく送られて黒いイルーが音もなく着地した。

「やっぱり重いにゃ…」

文句を言つてスラツシユアックスを落としたイルーは正面から見ると、目元の部分だけ赤い毛色をしていた。その両眼は黄金色。

見れば見るほど…

「ナルガクルガ？」

「ふん…それが分かるだけ、まだハンターとしては終わっていない…にゃ」

「え？え？…どういうこと？え、君、モンスター？」

改めて見ると、いくら小さいとはいえイルーにしては大きい。ライトの腰の高さに耳の先端が位置している。

「失礼なことを言うにゃ、俺はイルーにゃ。ヘタレなハンターが狩りをしているから見物にきたら、この様にゃ。俺に感謝するんだにゃ」

「イルー…なーんだ…良かったあ！ありがとね、猫ちゃん」

安心して息を吐き、ライトはしゃがみこむと黒猫の頭をなでた。すると露骨に嫌そうな顔をしてイルーが飛びのく。

「他のイルーにそうしたら、人間に褒められたーとか言つて喜ぶんだろうにゃ。次俺にそれをしたら、にゃっ殺す」

「にやっ殺す？」

「おそろくぶっ殺すと言いたかったのだろう。アイルーは自分の口を抑えて苛々している。」

「目つきこそ悪いがアイルーらしい大きな眼。どうやらナルガクルガではない…らしい。」

「君は野生のアイルー…じゃないわよね。どうしてこんな場所にいるの？ご主人様は？」

「…頼むからその幼子に話すような口調はやめてくれにや、吐き気がするにや」

「一度ため息をついてアイルーが首を振る。その行動にライトは気づく。」

「…先ほどから薄々と感じてはいたのだがこのアイルー…
…生意気だ。」

「その武器、アイルーの武器じゃないよね？ご主人様から盗んできたのかな？」

「少し発言がとげとげしくなっちゃったが、仕方ない。」

「失礼なことを言うにや、あんたは。これは真正銘俺の武器にや」

「確かに君はアイルーにしては体大きいけどさ、それでもその冗談は笑えないよ」

「冗談…あんた、むかつくにや」

「そういつて倒れているアオアシラを一度見たアイルーだったが、すぐにライトに視線を戻す。」

「にや」

「肉球が目の前に差し出される。」

「人間、目の前に肉球が差し出されれば触りたくなるものだ。ライトももちろん肉球をつまんだ。するとその持ち主は究極に嫌そうな顔をする。」

「にやにしてるにや？」

「え、違うの？」

「当たり前前じゃ！」

手を振り払ってからアイルーはライトに捕まれた手を川の水で洗った。失礼な奴だ。

塗れた手を舌でぺろぺろと舐めながら上目使いで言葉を続ける。睨み付けるようなまなざしなので、まったく可愛げは感じられない。

「報酬よこすにゃ、俺は助けてやったにゃ…仕事にゃ、金を渡すにゃ」

「報酬う？アイルーが人間からお金とるの！？」

「当たり前にゃ、世の中ギブアンドテイクにゃ」

「プライスレ…」

「無理にゃ」

断言されてしばらく黙り込んでいたライトだったが、すぐに声を荒げた。

「ご主人様を呼びなさいっご主人様を！この生意気な猫のご主人様に文句言ってあげるわ！」

「俺が人間に仕えているとでも思ったかにゃ？」

「え？」

「アイルーだけでクエストに行ける時代にゃ。俺は人間に仕える気なんてまっぴらなにゃ。ましてや俺より弱いヘタレハンターなんかに敬意を払う必要もないにゃ」

思わず絶句する。

このアイルーの生意気ぶりは筋金入りだ。いや、そんなことよりも

「ギルドに報告しなきゃ…アイルーが武器もって暴れてるなんて、ある意味モンスター並に厄介だわ」

「余計なことをするにやら、今すぐここで首を刎ねるにゃ」

物騒なことをアイルーが言い出した瞬間、ライトの懐で何か音が立てた。ピピピピピ…と断続的な音だ。それに気づいたライトが顔色を変えた。

もちろんその意味を知っているアイルーも眼を細める。

「乱入…クエスト…っ！」

「こんな不安定な時間に狩りなんてするからにゃ。逃げ切れればそ

れでいいが…にゃ」

瞬間、近くにあった木が燃え上がった。火の玉が飛んできた方向に眼をやると。赤い空と飛ぶ姿が。

見たことがある防具に似ている。

そう、あれは空の王者。

「リオレウスっ！」

とても倒せる相手ではない。それどころが逃げ切れることも可能か怪しい。

「…んにゃ？」

アイルーが空を見上げた。こんな状況で何をしているんだ…っとライトが睨み付けるが、アイルーはどうやら沈み行く太陽を見ていたらしい。太陽はすでに地平線にその身を隠し、僅かに光が残っているのみだ。

ライトに見られないよう、アイルーはその口元に笑みを浮かべる。

「…ここで死なれたら、報酬が貰えなくなるにゃ」

「何のことっ…うっ！」

突然アイルーが何かをライトに投げつけた。球状のそれに見覚えはある、使ったことはないが、捕獲用麻醉玉と呼ばれるものだ。顔面にぶつかったそれから白い煙が溢れ出す。

巨大なモンスターですら眠りへいざなうそれだ。

頭がぐらぐらして、視界が霞むのを感じながら、ライトは必死にアイルーに手を伸ばした。

「悪いが、裸体を女に晒す趣味はないにゃ」

「アイルーは…すでに…裸でしょう…が…」

意識が闇に包まれた。

不名誉な理由

月が出ているの出ていないの、そんなのはあまり関係ない。ただ日が沈めばそれでいい。

「ギヤアアアアア！」

気が立っているのか、リオレウスが吼えた。口の端から炎が漏れ出す。とても怒っている証拠だ。

自分相手にハンターを眠らせる。などという真似をされて、怒り狂っているのだろうか？

「別にあんたをなめてるわけじゃないにや。裸体を女に晒す趣味はないんだ」

にや。という語尾が取れ始める。

体が変化し始める。骨格が巨大化し、手足の骨が変化し、爪が短くなり、何より体中を覆っていた毛が消え去る。残るのは耳と尻尾のみ、そして黄金の眼は竜を見据え続けていた。

薄橙色の肌は人間のもの。服を着ていなかったため、当然人間の姿になっても服は何も着ていない。

黒い肩まである髪が揺れる。闇夜の中でも輝く瞳は猫のように瞳孔を開く。

八重歯のある口元が弧を描いて笑った。

「防具なしってのもまた。一興にや」

にや。という言葉が出てしまうと、男は眉をしかめて口元を押さえた。

「参ったな。癖になってる」

落ちていたスラッシュアックスをいとも簡単に担ぎ上げると、挑むような表情でリオレウスを見た。青年の黒い尾がうれしさから揺れる。耳がピンと張り詰め、どんな予備動作も見逃さないように緊張が張り詰めた。

「それじゃ。俺の相手をしてもらおう」

野宿の残骸だろうか：破けた布がを拾うと、それを体に纏ってから青年は走り出した。

「ん：うん？」

目蓋の裏が真っ白に染まり、その眩しさからライトは目を覚ました。そこにあるべき溪流の空はなく、いつの間にか自分がやわらかいベッドで寝ていることに気づき：慌てて体を起こした。痛む箇所はない。

「え？え？：私一体どうして…」

「お、目が覚めたのか、ライト」

目が覚めて最初に見た顔は、あの大嫌いなバルガだった。彼の心配そうな顔など見たことはなく、更にその心配そうな顔が自分に向けられていることに驚く。

それと同時に、疑問が湧き出してきた。

「どうしてあんたがここにいるのよ？というか、私はどうしてここにいるの？」

「あーあんまり質問せぬにすんじゃねえよ。俺が知ってることは話す」

バルガはライトが落ち着くまで、待ち、それから話し始めた。

「まず謝つとく。お前を馬鹿にしてすまなかったな。まあ：ハンターだつてことは認めてやるよ」

「かなり上から目線なのが気に入らないけど、まあいいわ。続けて」
「おう、お前を運んできたのは黒い髪の男だった。ハンターって身なりじゃなかったな：マントをはおつた。夜中にお前が帰ってこないもんでルツジさんとルフェアさんが探しに行くつて言い出して：まあ騒ぎになってたわけだ。その中でお前が背負われてきたもんだから、男に：まあルツジさんがキレた。んで殴つた」

「ええ！？」

どうしてそうなるのか分からず、話が飛躍した気がしてライトは声を上げた。するとバルガはいいにくそうに頭を掻き、言葉を続ける。

「まあ俺もその殴り合いに参加したわけだ」

「どうしてそうなるの！私を助けてくれたってことでしょ？」

「…そうか、女はそう考えるんだな。まあいい、とにかく俺もあいつを殴らないと気が済まなかったんだ。そういうことにしとけ」

「でも、ハンター数名に殴られるって…」

もちろん無事ですむはずがない。ハンターはモンスターと戦うために常に己を鍛えている場合が多い。剣士などは巨大な剣を振り回すために力が強い人間が多いのだ。そうでなくとも、重い鎧を着てすばやく動くために筋力が高い人間ばかりだ。

「心配するな。その男異常に強くてな…一発も当たらなかつたよ」

「ああ、それでその怪我」

先ほどから気になってはいたのだが、バルガの頬には赤い跡がある。殴られたせいなのだろう。

「でもルツジさんも歯が立たなかつたの？」

ルツジはユクモ村の中でも一目置かれた存在だ。そのルツジが殴ることが出来なかつた…その事実には驚き、バルガにたずねた。否定してくれることを望んで。だがバルガは頭を縦に振った。

「本当、大勢に襲われながらも余裕って顔してやがった。生意気な奴だつたぜ」

「生意気…ねえ」

そういえばあの生意気なアイルーはどうしただろうか？…とライトは頭をめぐらせる。

アイルーに麻醉玉を投げられてから記憶がないのだ。ならばアイルーならば何かを知っているかもしれない…と思ったのだ。

「そういえば、アイルーいなかつた？」

「アイルーってあのアイルーか？…んだお前、アイルー雇ってたのかよ？」

「雇ってないけど…いなかつたのね？」

「男とお前だけだつたぞ」

「ふーん…そう…」

あのアイルーはどこに行つたのだろう？リオレウスに襲われている状況で逃げ切ることが出来ただろうか？いくら生意気だったとはいえ、今あの竜の腹の中…なんてことがあれば、寝覚めが悪い。

そつだ、リオレウスだ！

「にしてもお前がアオアシラを倒すとはな…まああんな雑魚なら当然なんだが」

「リオレウスがいなかった!？」

「…ああ、いた」

なぜか少し不機嫌そうな声色でバルガが答えた。その声色を感じ取り、ライトはバルガを見るのだが、彼は気まずそうに顔をそらしてしまう。

「あつたよ…リオレウスの死体が」

「…え？」

「あの男の言つた場所に行つたら、アオアシラの死体とリオレウスの惨殺死体があつたんだ。村の連中はお前が両方やつたのか…って思つたらしいが、お前があんなことをするわけもねえし出来るわけもねえって俺が言つといてやつた。俺は嘘ついてないよな？」

少し言いにくそうにしていた理由が分かつた。モンスターを狩る以上、ある程度の傷がモンスターに残るのは仕方ないことだ。そんなハンターである彼が惨殺死体と表現するほどだ。

きつと酷いものであつたに違いない。

「惨殺死体…大丈夫、私はやってない。アオアシラだって…止めはアイルーが」

「アイルー…野生のか？」

「多分そつだと思つ」

「だつたらお前が倒したも同然だ、自信持て。運も実力のうちつて言うだろ？」

励ましの言葉をまさかバルガからもらえるところと思わず、吃驚してライトはバルガを見つめた。バルガは照れくさそうに頭を掻き、顔を背けた。

「その男の人に会いたい…その人なら何かを知ってると思う。だから」

「ああ、村長が客間に通してるはずだ。行ってみる」

村長の家はユクモ村の中でもかなり大きい。目立つつくりをしている。

開かれっぱなしの扉を覗き込むと、入り口のところに置かれた赤い布の敷かれた台の上に、村長はいつもどおり座っていた。

和風の服装をした女の美人で、竜人族らしく、耳がとんがっている。

「あら、ハンターさん」

「お久しぶりです村長さん、あの」

「分かっていますよ…あの男の方なら奥の客間のほうに居られます」
村長に言われたとおりに奥の部屋に向かい、その襖の前に立つ。

リオレウスを惨殺した人物。

あの状態で一人でリオレウスを狩れるほどの実力者であり、更にそのリオレウスを惨殺する狂気の人物。緊張した。

心臓の音が通常に戻るまで待ち、それから襖をそつと開けた。

「失礼します」

ところが中には男性はおらず、予想外の人物がいた。

「にゃにゃ、ノックもしないで開けるのかにゃ？」

「あー！ー！！！！」

「うるさいにゃ」

「どうして君がここにいるのよ！私を助けてくれた人はどこ！」

「何度も言わせるにゃ、うるさいにゃ。俺は代金を頂きにきただけにゃ。さっさと出すにゃ」

生意気なアイルーがそこにはいた。

「で、何この金額」

あまり村長の家に長居するのもしけないだろう…と自宅に戻ってきたライトは、今アイルーの突き出してきた請求書とにらめっこして

いた。

何度みても桁数は変わらない。

「当然にや。それが命の価格ってもんにや」

「こんなの」

その金額は大型モンスターを何匹か狩って、ようやく手に入るようなルツジのようなハンターにとっても大金と呼べるような金額だった。

「払えるわけあるかあああ！」

「うるさいにや…払えないのなら体で払ってもらうにや」

猫耳を伏せるようにして両前足で抑えながら、アイルーは目を細める。

「なにその卑猥な言い方」

「そう聞こえるのはあんたの心が腐ってるからにや。誰があんたみたいな貧しい体を」

「それ以上言ったら殺す、絶対狩ってやる」

「にやにや…ハンターで体って言ったたら、狩りってことにや。あんたが狩って稼いで返せばいいにや」

「だってこんな金額…無理だもん」

泣き言を口にする、アイルーがすつと目を細めた。

「だったらあんたの両親か、その友達に請求するにや」

「母さんとルツジさん…駄目、絶対駄目！」

「だったらがんばるにや」

「うー…この鬼畜」

「何とでも言う方がいいにや。俺が手伝ってやるからがんばるにや」
「え？」

今何か救済の一言が聞こえた気がして、ライトは顔を上げた。すると優しげな顔をしたアイルーがこちらを見下ろしている。

「俺が手伝ってやるっていったにや。俺は金を返してもらえる…あんたはハンターとして成長できる。一石二鳥に持ちつ持たれつってやつにや」

「本当に……いいの？言っとくけど私、契約料とか払えないよ」

「何度も言わせるなにや、ヘタレハンター」

「ヘタレハンターじゃないわ、ライトよ」

「俺も猫じゃない、ホルムにや」

笑顔を浮かべてライトは手を差し出した。ホルムの手をとって握手する。

こうしてハンターをやっつけていく理由が出来た。借金返済という不名誉な理由ではあるけれど。

才能と技量

自然はとても雄大で美しい。ハンターになり、いけなかった場所：つまり人間の手が加わっていない場所に立ち入ったとき、心からそう感じて魂が震えたのを覚えている。

青空を覆う木々、その葉と葉の間から漏れ、地面に不可思議な模様をつくる神秘的な木漏れ日。

それらを体で感じるとき、なんともいいようのない力が胸の奥で渦巻くのを感じる。

人間や竜人族は自然を手放した：といわれることがあるが、やはり本来は自然の中で暮らしていくべき生き物なのだ。と改めて実感した。それを隣で魚をむさぼっているホルムに告げると、彼は当然だといふふうに笑った。

「いまさらそれに気づくなんて、どうしてハンターが続いていたのか不思議にや」

「もともと、お母さんに進められてはじめてたことだしね」

「母君にや？」

「お母さんと：それからルツジさん。私には才能があるだのなんだの言って、私もついおだてられてそれに乗っちゃって：でも同期のバルガは今では名の知れたハンターなのに私といたら初期装備のままですろろろしてるようなヘタレハンターだし」

「にやにや：あんたには才能がある。それは俺も認めるにや。見抜けた母君はすごいにや。母君はハンターにや？」

「お母さんはハンターじゃなくて：って、いまさらっと私のこと褒めてくれた？」

たずねるとホルムは顔を背けて腕を組む。猫がやるととても可愛い。

「調子に乗るにや、俺はあんたの才能を認めただけにや：才能があつてもそれを使いこなせる技量がなければ宝の持ち腐れってやつにや」

「才能…と技量…」

「俺になかった才能をあんたはきつと持ってるにゃ。あのルツジが認めただにゃ…それを誇りに思うにゃ」

「才能…ねえ」

溪流の水に足先をつけながら、ぼんやりとホルムの言葉を聴いていたが、途中であることに気づく。

ホルムの言い方…それではまるで。

「ホルム、ルツジさんに会ったことがあるの？」

「…何故にゃ？」

「だってルツジさんのこと知ってるって言い方だったじゃない」

「別に珍しいことじゃないにゃ。あの人はハンターの中では伝説的な存在の一人なのにゃ。ラギアクルスの鎧を着たハンター…高名にゃ」

「らぎあ…くする？」

「ラギアクルスにゃ…あんた、こんな有名なモンスターも知らないにゃ？」

海の中で生活する青き竜、稲妻を背に背負い、海中の王者と呼ばれ、リオレウスと対と呼ばれる場合もあるモンスターなのだという。

ホルムの説明を聞いてもいまいちぱつとこないようで、ライトは首を捻っていた。

そんなライトの様子を見てホルムはため息をつく。

「あのにゃ…そんなんでいいのにゃ？あんたはハンターなのにゃ、それに、どうしてナルガクルガは知っててラギアクルスは知らないのにゃ？」

「ナルガクルガは…昔ちよつとあつてね。それに…海に住んでるモンスターでしょう？」

「孤島には行ったことないのにゃ？」

「あるけど」

「あるんなら常識にゃ。というか、よく今までそれを知らずに生き残ってこれたにゃ。あの地域の海にはラギアクルスが出没すること

があるにや、気をつけるにや」

孤島には討伐任務で行ったことがあるが、海のほうにはあまり近づいたことがない。あそこの海は浅瀬が途中まで続き、突然深くなってしまうのだ。

泳ぎのあまり得意ではないライトにとって海は脅威。

故に好んで近づくこともなかったし、これからもそのつもりだ。

どれだけ注意されてもなかなか自覚がわからないのはそのせいだろう。

「当分は俺が選んだ実力相応のクエストを受けていくとして、乱入があつたときその防具じゃ不安だにや。逃げ切ることも出来ずにお釈迦なんて、笑い話にもならないにや」

「防具：確かに支給されたのじゃ格好悪いもんね」

「目標は高く：最初はリオレイア辺りでいいにや。でもそのままの格好じゃリオレイアには勝てないのにや：だからここに来たのにや」

「でもホルム、今回のクエスト、採取クエストになつてるよ？チケツトを猫さんに渡したら帰れるってクエストなんでしょ？大型モンスターの出現情報はないけど」

「出現情報がないだけにや、ここは自然界にや：何が起こるかかわらない場所なのにや。ギルドが把握していないモンスターだつてたくさんいるのにや。まあ今回は狩りが目的じゃないのにや」

「狩りが目的じゃない？」

「ついてくるにや」

休憩は終わりなのか、ホルムは立ち上がると四つんばいになって駆け始める。アイルーはネコ型の生き物だ。二足歩行も可能な知能の高い種族ではあるが、それでも走るときは四つんばいのほうが早いらしく、すたすたと川を渡っていく。

座り込んでいたライトは慌てて立ち上がるとホルムの後を追う。

ホルムはすたすたと林の中を抜けていき、少し木々の間を抜けた場所が開けていて、そこでライトの到着を座って待っていた。

息を切らしてライトがようやく追いつく。

「はあ…はあ、酷いよホルム、先に行くなんて」

「甘えるにや…到着したにや」

ホルムが指した場所は崖にあいた洞窟のような穴。洞窟と呼べるほどの規模はないかもしれない。洞穴といったほうが正しい。

洞穴の周辺には誰かが生活したような跡があった。

薪の跡、モンスターのお骨、そして砥石の欠片…間違いない、ハンターがキャンプをした痕跡だ。

「これって…一体誰が」

「俺に決まってるにや、どうして俺が誰かも知らないハンターのキャンプ跡地にあんたを連れてくるのにや？」

「ホルムの？」

だがどうみてもアイルーでは不可能な痕跡ばかりだ。なによりアイルーが研石を使っているところを見たことがないし、僅かだが洞穴の奥に防具も放置されていた。

明らかに男物で、しかも大きさに人間の着用するものだ。

「もしかして…私を助けてくれたっていうハンターさんって、ホルムのご主人様？」

「んにや？…何のことを言ってるのにや？」

「ホルムは知らないの？…私を運んでくれたハンターさん。多分その人がリオレウスを討伐してくれたんだと思うんだけど」

「にや…あんた意外に鈍いんだにや。いや、意外じゃないけどにや。気づかれてると思うってたにや」

「ん？」

「気にするなにや…そんなハンター知らないのにや。この防具と武器は俺の趣味で作ったってことにしといてにや」

「作った！これ作ったの！？」

どうりで見かけたことのない防具や武器だと思った。通常はギルドの認定した武器屋に受注して作ってもらうのだが、それをアイルーがやってのけるとは思いもしなかった。

「もしかして、私に防具くれるとか？」

「…本当、呆れるほどヘタレだにや。それはあんたのためにならに

「やいし、自分で捕ったモンスターの武具じゃないと、意味がないにや。それに、俺は女物の防具を作る趣味もなかったし、留守にしている間にメラルーに幾つかパクられてるにや」

「えー…もつたいない」

「誰かの手に渡ることはないと思うにや。ギルドは一定価値以上の武具の売買を、製作者の許可証と持ち主の証明書がないと出来ないように定めているにや。泥棒猫どもがどうせ隠してるのにや…近いうちに取り返しに行くにや」

「今行かないの？」

「今回の目的の品は隠してたにや」

「洞穴の床には木の板が敷き詰められており、ホルムはそのうちの一つを剥ぎ取ると、その下にあつた空洞から何かを取り出した。

「それって…この前ホルムが持ってたスラッシュアックス」

「ずっと持ち歩いてるのも疲れるにや。これは俺が作った中でも一番気に入ってるやつにや。ナルガクルガの素材から作り上げた武具にや」

「ふーん…オリジナルじゃないんだね」

「見た目はカタログなんかで見る武具に似てるかもにや…でもこれには少しだけ仕掛けがしてあるのにや。ここを見るにや」

「鋭い爪が指差した先には、スラッシュアックスの羽の部分…ナルガクルガの羽が幾つか使われている部分があつた。その根元にい様な黒さと存在感を放つ塊がある。」

「これ…」

「…俺がある地域に立ち寄ったとき、偶然手に入れたものにや。何かの角だということまでは分かつたにや…でもそれ以上が分からないのにや。これをスラッシュアックスのビンに使用してるんだにや…でもおもしろいのにや。属性がちよくちよく変化するのにや。制御できれば便利にやんだが、難しいのにや…」

「属性の変化する角…」

「にやにや、もともとナルガクルガのお気に入りな武器だったのに

や。だから改造したのにや…つと、話がそれってしまったのにや、あんなに渡したかったのはこれなのにな」

大切にしているとは思えない扱いでスラッシュアックスを放り投げると、ホルムはもう一つ床穴から武器を取り出してライトに渡した。明らかに太刀とは違う重さに戸惑いつつも受け取る。

「…これって？」

「ユクモの槍改にな」

「いや、見れば分かるけど…私、太刀使いなんだけど…」

「あなたの戦いかたをみてたにや。力のないあなたに太刀は無理だと断言するにや…それに、ランスのセンスが見え隠れしてたにや」

「でも…」

「でもはなしにや…俺の目利きに間違いはないのにや、これ以上文句言っならにやっ殺す」

「私、ランスなんて使いこなせる自信ないよ？」

武器を変えるハンターが少ないわけではないが、大半が挫折して元の武器に戻っていく。そのハンターがベテランであればあるほど、自分の使いなれた武器での立ち回りが身に染み付いているのだ。

だから突然武器が変わっても、それに対処できない場合が多い。それを乗り越え、複数の武器を使いこなすハンターもいるのだが、大半が大型モンスターの軽々と狩ってしまう名の知れたハンターばかりだ。

「大丈夫にや、幸いあなたは太刀を使いこなせていないのにや。癖がないうちに気づけてよかったにや」

酷いことを言われているきがするが、それが事実なので反論のしようがない。

「作り手として、ランスの扱いなら少しは心得ているつもりにや。

これから使っていくうちに慣れていくしかないにや。そのために今日は小型モンスターの討伐をしに来たのにや」

つまり、腕慣らしをするために来たというわけだ。

「今からっ!？」

「善は急げというにや…日が暮れるまでには村に戻れるようにしたいにや。また心配されても迷惑にや…困った箱入り娘さんにや」
日が暮れるまでには村に戻る…と優しいことを言っているように聞こえるが、今はまだ朝…朝露が草に残っているような時間帯だ。今から夕方まで修行など、鬼畜もいいところだ。

「勘弁！」

逃げ出すために走り出す。その際きつちりとランスを背負っているあたり、ライトの真面目な根が透けて見える。

「俺から逃げられるとでも思っているのかにや！」

スラッシュアックスを背負ったホルムは、小さな体に重いそれを背負いながらも俊敏な動きでライトの背中を追い始めた。

この鬼ごっこの勝敗は目に見えていた。

しようとするのだが、あまり強く触ってはいけない気がしてなかなか抜け出せない。

「おい、あんた本当にいい加減に……っにやっ！」

脱兎のごとき速さでインナーを脱ぎ捨てたライトは、いつの間にか浴槽用のタオルに身を包んだ状態になっていた。いつ着替えたのかまったく気づかなかった。

いや、気づかなくてよかったと胸をなでおろした。

ホルムを抱えあげたまま、ライトは温泉へと飛び込む。熱めの湯が跳ねて顔や耳にかかった。

悲鳴を上げるとゆっくりと湯につけられる。

「ぷはあー…気持ちいいー」

まるでおっさんのような台詞を発してライトがようやく解放してくれた。だがそのときにはすでにどっぴりと湯に浸かっただけ、いまさら逃げるのも馬鹿馬鹿しくなり、ホルムはため息をついた。

「あれ？…もしかしてホルム、お風呂嫌いとか？」

「どこその猫と一緒にしないでくれにや。少なくともあんたよりは綺麗好きにや」

「んー…じゃあ何で逃げたの？」

「……」

突然黙り込んで俯いたホルム、そんなホルムを見上げるようにライトが覗き込むと、ホルムは慌てて顔をそらして犬掻き…ならぬ猫掻きでライトから距離をとる。

「あんたと一緒に入るなんて、とんだ罰ゲームにや」

「何それ、失礼だなー！」

しばらくそんなくだらない会話を続けていた頃、ふと空を見上げてホルムが飛び跳ねる。

「ん、どうしたの？」

「やつべえにや！！！！」

太陽の沈みかけた空…何か特に異常があるようには思えなかったのだが、ホルムは慌てて温泉から上がると部屋へ駆けていってしまふ。

ギルドと各ハンターに与えられた家、もとい部屋は渡り廊下でつながっているため、迷うことはないだろう。だがあのホルムが慌てた要因を知りたいライトは、まだ湯に浸かっていた衝動を殺しながら立ち上がり、着替えるとすぐにホルムの後を追ったのだった。

浴衣に着替えた状態でライトは廊下を走っていた。その姿を目にしたルツジは疑問に思う。確かにせわしない子ではあったが、あんなに楽しそうに走っている姿は初めて見た。

ハンターになつてから、ライトの顔にはどこかつまらなさそうな影があった。面倒そうな、辛そうな…そんな表情だった。

ハンターの中で浮いていたのだから仕方ないのだろうが、その表情を見ているだけで辛くなったのを覚えている。

「どうしたんだ？ 一体」

なににせよ良いことに違いはないのだが、どうしても気になってしまふ。これが親心というやつだろうか？…と、子供もいない身分ながらに思う。

ライトは子供同然に可愛がってきたし、それほど大切に思っていた。彼の親友が残した子供だった。

「モリス」

どこにいるんだ？

あんな可愛い子をいつまでも一人にしてふらふらしてんなよ、早く帰って来い。

何回目だろう？ 見えない彼にそう呼びかけたのは。

部屋に戻るとスラッシュアックスを武器庫に入れておく。いちいち溪流から持ち出すのは面倒なので、この部屋に置くことにしたのだ。しばらくはライトに世話になるのだが、この部屋で生活するつもりはさらさらなかった。

野宿にはなれている。早く脱出しなければ夜に…

「ホールムー...」

地獄の底から響き渡るような声。

「うにゃああっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

またしても脚が空を掻いた。抱きかかえられてしまうと、ホルムに脱出する術はない。

「どこに行こうとしてたのかな?」

「戻るんだにゃ...俺は村の外で野宿のほうが性にあってるにゃ」

「でも、ホルムは私のパートナーなんだよね?アイルーって普通、雇い主のハンターさんの近くで生活するものなのよね?」

「むぐ...っ」

そういうモンスターに關係ない情報にだけは妙に詳しいライトに悪態を心の中だけでつきながら、必死に暴れまわるが腕の中からは逃れられない。

「遠慮しなくていいから、一緒に住めばいいでしょ!」

「...寝台が一個しかないのにゃ。俺は固い床の上で寝るのは嫌なのにゃ」

「外だつた大して変わらないと思うけど...ま、一緒に寝ればいいんじゃない?抱き枕みたいで抱き心地良いし、ホルムは」

「にゃあああ!」

抵抗する間もなくベッドの中に抱きかかえられて入ってしまう。タオルケットが上から降ってきた。腕の中で本当に抱き枕のような扱ひを受けて、息苦しさからホルムは軽く咳き込んだ。

だがライトの気遣いの言葉はない。

不審に思つて見上げてみると、すでに彼女は目を閉じて眠っていた。

「早っ...今何時だと思ってるのにゃ...」

すーすーと規則的な寢息は、とても演じているようには見えない。

どうやら本当に眠ってしまったているようだ。無理もない。一日中慣れないランスの特訓だったのだから。

昼間の特訓を思い出し、ホルムは微笑んだ。

やはりランスのセンスがある。一日だとは思えぬ上達ぶり...この進

歩なら、すぐにでも大型モンスターを相手に立ち回れるだろう。もちろんすぐにリオレイアを狩りに行く…などという無謀なことはしないが。

それにしても…先ほどから何気なく抵抗を続けているのだが、まったく腕の力が緩まる気配はない。

駄目か…。

ホルムは諦めのため息をつく、目を閉じてから呟いた。

「どうなつてもしらないのにな」

ライトの部屋には大きな窓があり、雨の降っていない現在は簾も下ろさず開けっ放しになっていた。それ故直接日光が注ぎ込まれ、遠くに見える溪流や水没林…本当に小さいサイズだが火山も見える。

太陽が沈み行く。世界が闇に包まれる一瞬の美しい光の世界。太陽の光が悠久の自然をオレンジ色に染め、次に訪れるであろう闇の世界への入り口を彩る。

まさに絶景…その眩しいほどの光に包まれ、ホルムはそつと眠りに落ちた。

息苦しさを感じて目が覚めた。

確かホルムを抱いて寝たはずなのだが、今は逆に誰かに抱かれているような気がする。

夢と現の境界線をさまよい続けながらライトはそつと手を伸ばした。耳に触れた。

…耳？

確かに猫耳は猫耳に違いないのだが、なぜか…そう、違和感がある。あるべき位置にないというか、少し高い場所にあるというか…ん？

「ん…う…ん…ふああああ！」

欠伸をして体を伸ばし、目をそつと開けた。ぼんやりと焦点の定まらない視界…それが正常に戻るにつれ、今の状況の異常さが理解できた。

「え？」

「無事か、ライト！」

「ライト！」

数名がどたとたと床を蹴る音が聞こえたかと思えば、ライトの部屋にルフェア、ルツジ、バルガの三名が飛び込んでくる。

その三人が最初に見た光景はといえば、ライトと、そのライトと向かい合うようにして座っているシーツをはおっているとはいえ、全裸の青年の姿だった。

「あーあー…面倒な勘違い受けるだろ、この状況」

面倒な勘違い(後書き)

くあすえ d r f t g y ぶじこ I p w w w
勢いでやりました。反省はしています) r y

誰かの都合

お前はうちの娘に何をしてくれたんだ…という罵声がルツジから飛んでくるのかと身構えたのだが、なぜかその言葉はない。まあ、彼の娘ではないのだが、彼がそれほど大切に思っているのだということとは、その必死さを見ればすぐに分かることだった。

その代わり、しっかりとルフェアに殴られる。

女だからと油断するようなホルムではない。体をかがめて強烈な張り手を避けると、ひよひよいと部屋の端に移動して体を丸めた。

「ライトっ、無事か!？」

「バルガまで…あ!そんなことより、気づいたらあの男が隣で寝てて…っ!」

「気づいたら…じゃねーよ馬鹿ハンター。もともと一緒にいただろう。いい加減に気づけ」

「人に娘の寝台に忍び込んでその態度…離れてなさいライト、母さんが今この獣を討伐して…」

「ホルムっ!!」

今にも青年に飛び掛ろうとしていたルフェアが動きを止める。予想外の人物の名前が予想外の人間の口から漏れたからだった。

ルツジは信じられない…という形相で青年を見つめていた。

「…ルツジさんの知り合い?…というより今、この人の名前何て…」
「ホルムと呼んでいた。確かに。だがホルムとはあの生意気なアイル」
「の名前であり、目の前にいる得体の知れない青年とは関係はないはずだ。」

だが…彼の頭部に目をやった瞬間、その考えはいとも簡単に吹き飛んだ。

「え?」

彼の頭部には…三角形の耳が。猫の耳が存在していた。

そしてその目尻には赤い模様がある。黄金色の輝きを放つ瞳、それ

に生意気な声、そして彼の腰で揺れる黒いしなやかな尾…まさかとは思うが、声をかけてみる。

「もしかして…ホルム？」

「さっきそう呼ばれただろう。直接自己紹介でもしないと駄目か
や？…あ」

口元を押さえて青年が舌打ちをした。

「ちっ癖になつてら」

「嘘嘘嘘…これは夢だ。きっとそうに違いない」

一人でぶつぶつと呟きながらライトは目を閉じて大きく深呼吸する。冷静になった…と確認したところで、そつと目を開けた。

目の前の光景はもちろん何も変わらない。

「あれえ？…おつかしいな…夢なのに嫌にリアルだ」

棒読み口調なのは、きつと彼女も本心ではこれが夢でないことに気づいているからなのだろう。

何度も目を擦っているが、青年の姿は少しもアイルーに戻ろうとしない。

「どうしてお前っ…生きてたのか！」

「…ふん、ルツジか。随分久しいな…お前達が俺を捨てて以来か？」

「俺もモリスもお前を捨てたんじゃないっ！！」

ルツジの言葉を耳にすると、ピクンつと耳を揺らして、それから嫌そうな顔をしてホルムはルツジから顔をそむけた。本当に、心から嫌っているような動作。

どうやらルツジとホルムは知り合いであるらしいが、仲が良いわけではないようだ。

そんな二人を見て置いてけぼりにされているルフエアとバルガがライトに駆け寄り、未だに夢だ夢だと繰り返しながら壁に頭を打ち付けている彼女を止めさせる。

「どうやらこれは夢じゃないみたいね」

ようやく理解したライトが額をさすりながら呟いた。

「竜人なら見たことがあつたけど…まさか半猫なんて種族があるな

んで、知らなかったよ」

腕を組んで関心を示している母親の言葉を聴き、ルツジに目をやる
と彼は首を横に振った。

「そんな種族は存在しない。いや、もしかしたら俺達が知らないだけどこかにいるのかもかもしれないが、獣の姿になれる種族など聞いたこともないし、そもそも俺の知っているホルムは人間だった。少なくとも見た目はな」

「失礼なこと言ってくれるな。俺、傷ついたぜ？」

「それも虚言なのだろう？」

「お、流石。だてに年食っただけじゃないって感じか？本当に苛々するよ、お前の顔はいつ見ても」

「ちよつとちよつと、どうして口論になってるの！？二人って仲悪いの？知り合いなんじゃ…？」

今にも喧嘩が始まってしまいそんな雰囲気の二人の間にライトが体を滑り込ませる。

今は深夜なのだ。眠っているハンターの人も村人も多い。そんな中ルツジほどの人間が喧嘩をすれば、よほどの騒音が鳴り響いてしま
う。

近所のためを思い、険悪なムードの二人の間にライトは身を放り投
げたのだった。

「ライト、知り合いだからって仲が良いだなんて、大きな勘違いだ」

「ん…何か違和感がある」

「俺が人間の姿で話すことが…か？俺にとっては普通なんだ、許せ」

「つというか服着てよ！」

首をすくめる青年ホルムは確かに格好良いのだが、それがほとんど裸に近い状態であるため、ライトは悲鳴のような声を上げた。

そんな二人のやり取りをルツジは険しい表情で見守っている。

「ルツジ、彼がホルム？」

「ああ」

突然母親であるルフエアまでも意味の分からない話をはじめ出す。

もう何がなんだか分からず、ライトはさすがるようにホルムに視線を向けた。

ホルムはすつと目を細め、ルフエアを見つめていた。

「ん？…何だお前、どこかで…」

「あたしはずつとユクモ村にいたからね…あんたがいた時にもいたのさ。あたしの夫、モリスと並ぶ伝説のハンター、ホルムさん」

「お父さんと並ぶ？」

「お父さん！！！！？」

驚きの声を上げたのは、珍しくもホルムだった。相当驚いたらしく、目を大きく見開いてライトを凝視している。そこまでじつとホルムに見られたことは初めてなような気がして、ライトはなぜか顔をそらしてしまった。

「何だお前、知らなくてライトと一緒にいたのか？」

「初耳だ…アンタ、なんで言わなかった！？」

「え、ええ！？言わないといけないことだったの？」

「つたりまえだ！」

思いつき罵声を吐くと、ホルムはそれっきりおとなしくなつてなにやら思案している顔で座り込んでしまった。腕を組み、視線が床に向けられている。

何かを考えている様子のホルムの姿を見て、ルツジが眉間のしわを増やした。

「危険だ」

「ん…どうしたの、ルツジさん？」

「ライト、お前はホルムをオトモアイルーとして雇っているのか？」

「うん、今日ギルドで手続きも済ませたよ？」

「悪いことは言わない…やめておけ」

「何で！？そりゃあ勝手にアイルー雇ったのは悪いってお母さんには思ってるけど、ルツジさんには関係ないことでしょ！」

何故かホルムを貶された気がして、何故か怒ったような口調でルツジを責めてしまう。ルツジは何かを隠しているかのように口を噤む

と、気まずそうに目をそらす。

そんなことをするルツジを見たのは初めてで、だからこそ何か隠している…と確信できたライトは、すぐにホルムに駆け寄る。

「一体どういふことなのよ！ホルムとルツジさんはどういふ仲だったの？」

「…別に、たいした仲でもない。腐れ縁みたいなものだ」

「俺も同じく…悪いなライトちゃん、これは俺とこいつの問題なんだ」

「そんなのって！」

「あら、女には入る余地はなしってことかしら？」

ルツジの物言いに怒りを覚えたのはライトだけではなかったらしく、ルフエアもバルガもルツジを睨み付けるようにしてライトの背後に回っていた。

3対1…圧倒的数の差。

ルツジは大きなため息を吐いた。

「そんなに怖い目をされても、話したくないことぐらい、誰にだって一つや二つあるものだ。俺にだってある…そういうことにしといてくれないか？」

「ルツジさん…」

「んなことより、どうして誰もツツこまねえんだよ？こいつ、耳と尻尾があるんだぜ？」

しばらく黙り込んでいたバルガだったが、どうやら進まない会話に我慢の限界が来たようで爆発するように叫んだ。その声にホルムがうるさい…と耳を伏せる。

人間の姿になっても性格が変わるわけではないらしく、相変わらずの生意気っぷりだった。

「そういえばそうだったな。ホルム、お前どうしてまた、そんなに可愛げのある格好になってんだ？」

「にやつ殺すぞ…、男に可愛いなんて言われても嬉しくもない、吐き気がするだけだ」

お前だとなおさらな…と付け加えてから、ホルムは立ち上がった。

壁に背中を預けて、随分と我が物顔でライトの部屋を満喫している。

「知らねえよ…こつちだつて迷惑してるんだ、この呪いには」

「呪いねえ…」

ホルムのこぼした言葉をルフエアが拾って呟いた。

明らかにホルムの「知らない」という言葉は嘘だった。確実に心のうちに何かを秘めている表情と声色をしていながら、なおかつそれを隠しているようでもある。

「本当に隠し事が多いもんだね、男つてのは」

呆れたようにライトの後ろでルフエアが呟いた。

その夜がそれだけで終わったかというのと、ライトにとっては問題の追及は朝…という形で終わったのだが、ホルムにとってはそうではなかった。

深夜、もう太陽も昇り始めようという時間帯になってホルムは目をあけた。一瞬だけ赤い瞳が光の尾を引き、すぐに黄金色の瞳に変化する。

彼は地面に布を敷き、その上に体を横たえていた。

野宿に慣れているのなら同じ寝台で寝る必要もないだろう…というバルガとライトの意見によるものだった。

ちなみに全裸ではなく、バルガが貸し与えてくれた浴衣に身を包んでいる。

硬い場所で寝たせいか体のいたるところが痛む。

顔を擧げて立ち上がると、伸びをして体のあちこちを解した。もうすぐ夜が明ける。そうすればこの人間の姿でいることも出来なくなってしまう。

ホルムは欠伸をすると、目の前にある寝台、その上で愛嬌のある顔を僅かに笑みの形にゆがめながら眠っているライトの姿を見下ろした。

「…モリスの娘…か」

あの豪胆で神がかった動きのハンターとは似ても似つかない。おそらく母親であるルフエアに似ているのだろう。妖艶さすら漂わせる美しさは、確かにライトにも引き継がれていた。

モリスを許すことなど出来なかった。

今更…。

どうしてモリスの娘だと最初に気づかなかったのだろうか？

今更…復讐など出来るわけがない。ルツジはそれを警戒していたよ
うだが。

…らしくない考え方になっていく。一度顔でも洗ってこようか…そう
思い、ホルムは部屋を出て長い廊下を歩いていく。

月明かりだけが頼りの世界、廊下の向こう側から人影が近づいてく
るのが見えた。黄金色の瞳は世間の中でも平時と同じ働きをしてく
れる。

ホルムは一番今会いたくなかった人物に合う羽目になり、顔をしか
めて立ち止まった。

「偶然だなんて言うなよ、俺を待っていたんだな？」

「ホルム」

向かい合うようにして立ちふさがったのはルツジ。今からクエスト
に行くのか、鎧に身を包み、武具を手にしていた。物騒な立ち姿に
ホルムの眉が跳ね上がる。

「こんな夜更けに仕事か？…さすが、伝説のハンターさんは違うな」

「それはお前とモリスのことだ。俺は違う…まだまださ」

「俺が伝説ね…悪いほうの伝説だろ？少なくとも英雄談じゃない。

まだ化け物扱いされてんのか？俺は…この村で」

腿の横に放り出されたホルムの拳がぎゅっと握り締められた。爪が
食い込むほど強く、掌の肉を巻き込むような勢いで。

「あんたとモリスは英雄だ、それでいい…なんせ村を脅かしていた
ナルガクルガの群れを討伐したんだからな。ああ英雄だ…俺も認め
る」

冷たい瞳が赤い色を帯びる。

「昼間の無様な姿なら、俺だと気づく奴も村にはいないだろ…俺に何か他にも文句があるのか？」

「忠告をしに来た」

「忠告？」

投げナイフを取り出し、素早くルツジはホルムの喉元に切っ先を突きつけた。

動けなかったのではない。動こうとしなかったホルムは静かにルツジを見つめ続ける。

「ライトにもしものことがあれば、俺はお前を殺す」

「…はっ、愛されてるな、あの娘は。ハンターに人間殺しまで宣言させるなんて、魔性の美ってやつか？」

「……」

「冗談だよ…笑えよ…っははははは！あぁ、いいぜ、殺せ。俺もアンタをにやっ殺したいぐらい憎んでる。その気持ちは分かる、否定できないぜ。俺は化け物だから、人間殺しにはならないってんだろ？…それでいいさ。殺せ。俺を殺した瞬間から、アンタも俺と同じ化け物だ。アンタ達が俺をそう呼んで蔑んだように、アンタも化け物だ！何が人間殺しだ…っ！何がハンターの心構えだ！んなもの所詮、誰かの都合で作られただけのもんだろうがっ！！殺せ！」

一気に叫ぶと、炎のように赤かった瞳が休息に落ち着きを取り戻す。無表情に戻ったホルムは、先ほどまでの激情が嘘だったかのように低くよく通る冷たい声で返した。

「ライトが俺に金を返すまで、殺す気はない」

それだけ告げると、自分の喉元に突きつけられたナイフを叩き落とし、怪しく笑った。

ナイフが宙を舞い、回転しながらゆっくりと木製の床にぶつかって倒れる。

金属の音が響き、ようやく体を動かすことが出来たルツジは自分の掌を見つめた。僅かに震えるその手は、ハンターとして抱いてはいけない感情による震えだった。

誰かの都合（後書き）

狩りシーンがなかなかありませんね。申し訳ありません。

異常出沒

朝目がさめると、そこにはいつもどおりアイルールの姿になたホルムがいた。とても不機嫌そうな顔でこちらを見下ろしている。

「ん、おはよう」

「おはよう…じゃないのにゃ！今何時だと思ってるのにゃ！」

「え…」

体を起こし寝台から飛び出す。外を見ると太陽はすでに高い。どうやら昼近くまでぐっすりと眠ってしまったようだ。

起こしてくればよかったのに…とライトがホルムを見ると、ホルムはどうやら何度も起こしたようで、とても不機嫌そうに鼻息を吐いた。

「そついえば…変な夢見たんだ。ホルムが人間になって、ルツジさんもお母さんもバルガもいて…ホルムが少し目つきの悪い怖い人になってて」

「二回繰り返し返すにゃ、俺は人間になったにゃ…その話は夢じゃないのにゃ」

「…またまた、ご冗談を」

「俺がどうしてあんにそんなに面白くもない冗談を言わないといけないのにゃ？」

数秒黙り込んだ後、ライトはため息をついて髪を両手でぐしゃぐしゃとかき乱した。

「そつだよねーえ…あんなリアルな夢あるわけないもん！」

ああーと悲痛な悲鳴を上げるライトを呆れたようにしばらく見ていたホルムだったが、誰かが部屋にやってきたことに気づき、にゃ…と声を上げた。

やってきたのはリオレウス装備に身を包んだバルガ。どうやらこれから狩りに出るところらしく、大剣を背中に担いでいる。

「よ、無事か？ライト」

「バルガ！？珍しいね、私の部屋に来るなんて」

「いや…まあ…心配だったからな。雄猫と二人つきりなんて、ライトが可哀相だろ？」

「にやにや…誰がこんな貧しい…にやああ！！！」

言いかけた言葉をさえぎられ、かなりの勢いで飛んできた枕を顔面に受けてホルムは倒れこむ。枕を投げたのはもちろんライトなのだが、その顔は笑顔のままだ。

「心配ありがとう、バルガ。これから狩り？」

「お、おう。この付近にティガレックスが出没してるらしくてな。

この付近ではあまり見かけねえやつなんだが、放つとくわけにもいかねえだろ？」

「異常出沒つてやつね…気をつけて」

「そつちも気をつけとけ。最近この辺の狩場、荒れてんぞ…ギルドは問題ないって言ってるが、その場所にいる俺が言うんだ、間違いねえ」

それだけを言いに来たのか、バルガはすぐに部屋を後にする。部屋から出る前に、倒れているホルムの耳に口を近づけて忠告をするのを忘れない。

ホルムは立ち上がると、バルガの背中を見て鼻を鳴らした。それから枕をライトに投げ返す。

ライトはそれを軽く受け止めると、すぐに部屋に置かれている本棚に歩みより、分厚い本を手にとってベッドに座り込んだ。

「何してるにや？」

「うーん…ティガレックスってモンスターについて調べてみようかと…」

「ハンターなのにそんなことも知らないのにや？」

「あ、あつた」

ホルムの挑発を完全に無視して、ライトは見つけたページに描かれているイラストに注目した。

「なんか…強そうだね」

「厄介な動きをするモンスターにや。バルガなら大丈夫にや…リオ
レウスを相手に出来るほどの男にや、信用してやれにや」

「別に心配なんてしてないし！」

本を勢いよく閉じると、ライトは大きく伸びをする。

「俺達も出かけるのにや」

「ん？どこに？」

「クエストに決まってるにや。あんたの防具を作るのにや」

「防具？」

「そのままの防具じゃ、強いモンスターとろくに戦えないのにや。

高いレベルの防具を要求してるわけじゃないのにや…とりあえず、

強いモンスターと戦えるレベルの防具にしるって言うてるのにや」

「強いモンスターと戦える防具…ねえ」

そんなことを言われても、つい先日アオアシラを倒したばかりのラ

イトでは分からない。頭をひねっていると、ホルムが呆れたように

助け舟を出した。

「とりあえず、リオレイアでも狩りに行くにや？」

「り、リオレイア!？」

いきなりライトにとっては高レベルなモンスターに、驚きの声を上
げた。

「絶対無理だよ!リオレイアってあれでしょ…この前襲ってきたリ
オレウスの雌でしょ!？」

「大丈夫にや…毒とサマーソルト…それに爪の攻撃に気を配れば…」

「ほとんど全部ってことじゃん!…えー無理だよ!?!いきなりレ
ベル上げすぎだよ!」

「自信を持つにや。ランスに武器を変えた今、あんたは強くなって
るはずなのにや…それに、俺がついていくから問題ないのにや」

予想外の言葉にライトは黙りこんでしまう。

「でも、ホルムってアイルーだし」

「だからこんなに遅くまで眠らせてやったのにや」

「え?」

ホルムは怪しく微笑むと、ライトを見上げた。

「出撃は夜にや」

出撃は夜。つまりそれは、ホルムが人間の姿でついてくるという意味だった。

得に困ることはない。むしろ頼もしいとすら思う。

アイルーの姿でスラッシュアックスを使い、それでアオアシラをいとも容易く倒してしまったホルムだ。人間の姿でも存分にその力を発してくれるだろう。

例の黒スラッシュアックスを部屋の地面に横たえ、砥石で刃を砥いでいる。

「そういえば：リオレウスを狩ったのって、ホルムなの？」

「あの状況で他に誰がいるのにや」

「ふーん」

リオレウスを倒せる力というのは驚きだったが、そうなのであればホルムが麻酔玉を投げつけてきた理由も分かる。「裸体を女に見せる趣味はない」とか言っていたのをライトは覚えていた。

ライトがそれ以上ホルムを言及しなかったのは、怖かったからだっ

た。
リオレウスは惨殺されていた。その情報が頭の中に居座り、どうしても忘れられない。ホルムのことは嫌いではない。むしろ心許せる相手だ。

出会ったばかりとはいえ、助けてくれた優しいアイルー…もしくは人だと思っている。

そのホルムの印象と、リオレウスを殺した男の印象が、どうしても一致しない。

「どうかしたのにや？」

「ぼーとしているライトを不審に思ったのか、ホルムが覗き込んでくる。」

ライトは慌てて笑顔を浮かべると、なんとなく頭に浮かんだ疑問を
発した。

「そういえば、ホルムって人間なの？アイルーなの？」

「にゃ、昨日の話を忘れたのにゃ？俺はもともと人間だったのにゃ、
今も人間にゃ」

「でも人間って普通アイルーになれないよ？」

「当たり前なのにゃ、馬鹿にしてるのかにゃ？」

「だってホルムは」

「俺の話はどうでもいいのにゃ…ほら、さっさと準備するのにゃ」
使い終わった砥石を投げ捨てると、スラッシュアックスを小さな体
に背負ってホルムは立ち上がる。

「どこに行くの？」

「防具を取ってくるのにゃ。夜には戻るにゃ…それまでに準備を済
ませておくのにゃ」

「あ、うん！」

にゃにゃにゃと声を上げながら、ホルムは部屋を四足走行で出て行
った。

異常出沒（後書き）

更新遅くなりました。
そろそろ狩りシーンです。

発情猫？

夜に戻るといつていたホルムなのだが、なかなか戻らない。

痺れを切らしてライトはなけなしの金を叩いて回復薬や砥石を用意し、ユクモ装備を纏って村の出口付近で待っていた。

溪流はわりと村に近い狩場である。

特段寒い時期でもないのだが、日の暮れた夜、一人で待ちぼうけをくらうという状況もあいつて、少し寒気を感じていた。

両手で体を抱きかかえるようにしてライトは震える。

「うづ…遅いよ、馬鹿ホルム」

「馬鹿で悪かったにゃ」

聞きなれた声、口調、しかしいつもよりわずかにトーンが低い気がして、ライトが声のしたほうを見ると、村の出口の細道、その両脇にある木の一本に人影が見えた。

高い枝からさつと飛び降り、膝で勢いを殺して着地する。

黒く長い髪がさつと翻り、あまりごちゃごちゃしていない装備がカシャンつと音を立てた。

金色の目、黒い髪、その毛並みはあの生意気なアイルーを彷彿とさせる。

青年は、ホルムはにっつと笑うとライトの前に立った。

伸びた身長のせいで見下ろされる形になり、落ち着かない。

「でつか…」

「これが本来の俺の姿だ。本当ならあなたに見下ろされるような慎重じゃにゃいんだ」

ん…と不満そうな声をあげてホルムが口を押さえる。

どうやら「にゃ」という単語が無意識に出てしまったことに対して苛立ちを感じているようで、舌打ちをすると目を伏せて頭をガシガシかき乱した。

手の甲を覆っているのは黒い腕あて。肘まではつけているが、それ

以上の場所は何もつけていないため白い肌が月明かりにさらされている。

「とうか、その装備で行くつもりなの？」

「悪いかな？」

「悪いってどうか…死ぬよ？」

彼は上半身に何も纏わず、インナーすら着ていない。見ているこちらが寒くなる。

下半身はしっかりと黒い衣を着込み、越しまわりには鎧もついているため申し分ないのだが、そのせいで余計に上半紙の危うさが浮き彫りになっていった。

細く、しかしだからといって痩せた印象もつけられない鍛え抜かれた上半身には、胸のあたりから臍の周辺にかけて朱色に近い赤色の文様が刻まれていた。

すでに目尻に赤い刺青のようなものがあるというのに、それに飽き足らず体にも入れたのだろうか？

不思議な模様はたまに村の外でみかける遺跡、そこに刻まれている古代文字によく似ており、不思議そうにライトは顔を近づけた。

「刺青？」

「馬鹿か、呪いだ」

「ふーん」

興味がわいてライトが指先を紋様に触れさせると、びくつとホルムは体を震わせてライトの近づいていた頭を押し返した。

突然抵抗されてわけのわからないライトは驚いてホルムを見る。

少し体を離れたホルムはこころなしか頬が赤い。

「か、勝手に触るにや！」

「え？アイルーのときは撫でてあげるとゴロゴロ言ってたよ」

「くそつ、屈辱的思い出。それにな…お前は仮にも女なんだぞ？男の腹に顔なんて埋め」

「デリカシー!!!」

今度はライトが顔を真っ赤にして叫んだ。

ホルムは頭から突き出した猫耳を押さえ顔をしかめる。どうやら聴覚は人より発達しているようだ。

「うるさいにゃ」

「うっ…最悪だよこの雄猫」

「誰があんたみたいな絶壁…ほら、無駄口はこの辺にしてさっさといくぞ。陸の女王の寝込みを襲う」

黄金の瞳が闇の中で怪しく輝く。

その案は確かにいいのだが…。

「なんか、言い方やらしくない？」

「あんたは反応しすぎにゃ」

夜は夜行性でない限りは眠りの時間となっている。

眠っている間は当然だが無防備になる。そこを狙われることはよくあり、そのため野生に生きるものたちは少々神経質になっているところがある。

それは草食動物のほうが酷く、近づいただけでギャーギャー喚かれてしまった。

「ひっ、ごめんね！」

「馬鹿」

ガーグアはおそらく卵を護っていたのだろう。

不用意に近づいてしまったライトにむかって警戒心をむき出しにし、絶縁体でできているといわれる大きなくちばしを広げて威嚇した。

威嚇するだけならまだしも、突進しようと長い首をもたげたからたまらない。

ライトがあわててランスを構えようとするが、太刀と同じ要領で横にふりきってしまったため、その身でガーグアを殴りつける結果となってしまった。

「ぐあああ！」

怒り狂ったガーグアがライトに飛び掛ろうとすると、突然現れた黒い刃に横なぎにされ、血の跡を引きながら吹き飛ばされた。

地面にたたきつけられ、しばらく痙攣してから動かなくなる。

「まさか小型モンスターも倒せないとはにゃ」

「ち、違うよ！、ね、ねえ…やっぱり私には太刀が向いてると思うんだよね！」

「んにゃ？」

ぎろつと音がしそうなほど鋭い目でにらまれ、ライトは一度言葉を飲み込みかけるが首を振る。

「…確かにランスには癖があるな、だがあなたに太刀が扱えるとは到底思えない」

「ど、どうして」

やってもいないのにわかるの…と叫ぼうとしたのだが、ホルムはその言葉をさえぎる。

「そもそも、あなたはあまりスピードがあるほうじゃない。今だつてそうだ…小型モンスターの攻撃を避けることも難しいんだろ？ 反射神経やスピードなんてものは力や体力と違って、努力で身につけるには時間がかかる。元から持つてるセンス、才能に頼る部分が大きいからな。だったら避けるのをあきらめて、盾で防いだほうが早い」

意外としつかりした理由があるのだとわかり、ライトは閉口した。

ホルムはよく自分のことを見ていたのだと実感させられる。なぜかそれが照れくさく、ライトは自分の不可思議な感情に首をひねって金色の目から目をそらした。

「それに…だ」

「ん？」

「あなたには突きのセンスがある。自信を持って」

ふつとホルムがその仏頂面を微笑みに変えた。

笑うと人が変わる。驚くべきほど柔らかな表情はやさしげであり、とてもあの生意気で鬼畜なアイルーだとは思えない。

ポーンとライトが見入っているとホルムは再び仏頂面に戻り、妄想の世界に旅立っているライトの頭を容赦なくたたいた。

「いたあー!!」

「戻って来い愚か者、狩場でばさつとするな」

「う、うん、ごめん!」

前言撤回。どうやら優しさなど欠片もないようだ…とライトは内心毒づいた。

まさかそれが聞こえたわけではあるまいが、ホルムはライトを一瞥するとさっさと歩き出した。

「どういうことですか、ルツジさん!」

怒声をあげたのはバルガ、ギルドにて夜のひと時をすごしていたハンターたちは突然の声に驚いてルツジの座る席へ注目した。

酒瓶片手に座っているのはルツジ、その向かいに椅子に座ることなく立って興奮しているのはバルガ。

「心配することもないだろう。あの子はもうとっくに一人前のハンターだ」

「あいつが一人前え?んなわけないでしょう!?ルツジさんだってあいつの親代わりをしてきてわかってるはずだ。あいつはハンターに向いてない」

「それは少しライトに失礼だ。あの子がどうしてハンターを目指したのか…君は知ってると思っていたんだが」

ぐっと言葉につまったバルガはそれでも怒りが収まらないようで、拳は強く握られている。

「分かっている、そんなあいつを護るために、俺が先にあいつの目標をぶつ殺すために…俺もハンターになったんだ。あいつに戦いは似合わねえ…ルツジさんだってそれは」

「大丈夫だ、今回の敵は陸の女王、苦戦はするだろうが倒せない相手じゃない。それに…新しく不思議なアイルーが組んでくれたみたいだからね」

アイルーとって思い浮かぶのはあの男しかない。

「はあ!?!」

今度は驚きの意味でバルガは声を荒げた。

「ま、まさかあの男と二人で行かせたつてののか！」

「はは、大丈夫だよ。ホルムは強い…それにライトに危害を加えない」

「た、確かに危害はくわえねえかもしれないけどよ！聞いた話だとあいつは夜…夜になったら」

「人に戻るね」

さらっと言つてのけたルツジにバルガは啞然とした。

それからぎりぎりと言がなるほど奥歯をかみしめる。

「あんな発情猫とライトを二人つきりにして笑つてられるか！とても無駄だぜルツジさん。俺あ今からあの馬鹿を追いかける！」

ルツジの答えを聞かずにバルガはギルドを飛び出していった。

その後姿を見てルツジは苦笑する。

「男を惹きつけてやまないところはルフェアに似たな」

発情猫？（後書き）

更新遅くなりました、ごめんなさい。
待っていてくださった皆様に心より感謝を。

報われない話

「それにしてもというかなんというか、暗いのによく見えるね」
溪流には人の生活していたような跡はあるものの、現在人が住んで
いるかというそうではない。

ゆえに松明などの明かりが定期的にあるわけもなく、狩場で頼りに
なるのは月明かり、それに暗い場所が怖い…とライトがホルムの反
対を押し切って持ってきた松明の明かりだけだ。

炎の届く範囲以外はほとんどが闇に閉ざされている。

月明かりが澄み切った水に反射して明るい場所もあるにはあるのだ
が、それでも物陰になっている場所はほとんど真っ黒に見える。

「夜目が利くんだよ」

「アイルーだから？」

「そうかもな、まともだった頃から夜は得意だったが。というか、
ハンターたるもの夜目が利かなくてどうする？」

呆れたホルムが肩をすくめることぐらいはライトにも認識できる。

見下されたような言動にライトは頬を膨らませた。

「あ、でも夜が好きっていうのは分かるなー！うん！冷たい風とか
…静けさとかいいよね」

耳を澄ませば浅い水辺に水の流れる音、薄暗闇の中遠くから聞こえ
てくる虫のカラカラという声が聞こえてくる。頬を撫でていくのは
昼間とはうってかわり、冷え切った風。

目を閉じて酔いしれるようにライトがつぶやくと、ホルムはやれや
れともう一度肩をすくめる。

「その静けさを壊しているあんたが言えたことかにや」

「むっ…ホント一言多いな」

「それに…だ！」

言葉を強調するとホルムは腕を組む。

お説教モードに入ったホルムにライトは少し身構えた。ホルムと話

をするのは好きだが、お説教は嫌いだ。

「俺達の狙い通り夜を就寝時間とするモンスターばかりがいるわけじゃない。たとえばあんたも何度か会った事があるだろ？ ジャギイなんかは夜眠っている奴らもいるが、狩りを目的として活発に行動してるやつらもいる。陸の女王だって例外だとは言いつれない」

「あー！」

「…聞いているのか」

「ホルム！ホルム！見て！」

話を完全に無視されて少々不機嫌になっていたホルムは投げやりなライトの指差すほうに視線をやり、そして彼女がどうしてはしゃいでいたのかわかる。

暗闇の中、水辺の草むらの上を金色の光を放つ虫。

「雷光虫か…光蟲だな」

「すごい…綺麗！」

「そんなに珍しいものでもないだろう」

ハンターをしていればよく見かける虫であり、閃光球にも頻繁に使われている。

どうしてライトがそんなに喜ぶのかが分からず、ホルムは心底理解できない…といった風で首を傾げた。

「うん、でも私がいつも見てたのは昼間だから。夜に一人で狩りつて言うと、よっぽど狩りなれてないと村長さんもルツジさんも駄目って」

「…なるほど」

久しく見ないと思えば、いつの間にかやら親ばかになってしまっていたようだ。あの元親友は。

歓声を上げ続けるライトをしばらく放置しておき、そろそろ行動を起こそうとホルムはスラッシュアックスを背負いなおした。

上に鎧がないため、腰から肩にかけているベルトに固定されている。

「雷光虫はともかく、光蟲がどうして瞬くか知っているか？」

「え？」

「…そいつらは死ぬ直前に輝きを放つ。報われない話もあったものだ。それを見て綺麗なんて喜ばれるんだ。本人達からすればたまつたものじゃない…必死に生きて、美しくなんてない様を綺麗なんて言われるんだからな」

どうしてそんなきつい言葉をライトにかけたのか、ホルムは自分でも理解できずに戸惑っていた。

対するライトはホルムの教えてくれたことに驚きながらも、その話をしたときのホルムの、どこか悲しそうな、憂いを帯びた表情に見入っている。

何がそんなに哀しいのだろうか？

知りたいと思つた。

「興を削ぐ話だったな、すまん」

「私には難しい話だけど、私はホルムの言うふうには思わない。私達はハンター…モンスターを討伐だとか、英雄とか…呼び名は綺麗で誇り高いもののように思える。確かにハンターには誇りがある。けどやってることは自分達のために他を殺すことだよ」

「全否定だな」

ハンターでありながらハンターを否定するその言葉に、ロストは苦笑する。

ロストもまたハンターだ。

だからこそこの事実に対する明確な正解は持ち合わせておらず、またハンターならば誰だつて言葉につまるだろう。この少女の口にした事実はそれほど残酷だ。

だからこそ何も言えず、自嘲の笑みを浮かべるだけだ。

しかしライトの言葉はそこで終わりではなかった。

「でもそれで悩むのって、失礼だよな」

「失礼？」

「私達は狩りをして生きている。生き物の命をもらって生きている。それを忘れないことがハンターとしての心構えだつて」

そこで初めてライトの言葉が彼女の言葉ではなく、誰かから聞いた言葉であることを悟る。

「誰の教えだ？」

「ルフエア、私のお母さんから聞いたの。私の…お父さんの言葉だつて」

「……」

モリス。

目を伏せ、心の中でかつての狩友を懐かしむ。

「ハンターは命の重さを知ってる。だから私はホルムのようには思わない…一生懸命生きて、その果てに尽きることはとっても尊いことだと思つから、それを綺麗だと思つよ」

「綺麗…にゃ」

言つてしまつてからはつとして口を押さえる。

すると案の定気づかれていたようで、ライトは笑つた。

「笑うにゃ」

一度癖が出てしまえば続くのは簡単だ。取り繕つとすればするだけ癖が出てどんどん立場が悪くなる。

よりにもよつてどうしてこんなシリアスな場面に…とホルムは内心で舌打ちすると、顔をわずかに紅潮させてライトを黙らせようと睨む。

その顔から瞬時に表情が失せ、狩り人のものへと変わった。

「え？」

「黙れ…火を」

「う、うん」

ホルムに命じられたとおりライトは松明を水に浸して消すと、薄暗くなった空間に不安を覚え、ホルムの背中に隠れるようにして立つた。

明らかに周囲の空気が変わった。張り詰めている。

「お出ました」

「ど、どうして分かるの？」

「千里眼」

どうやらホルムの装備している防具の中に千里眼の特性のついているものがあるらしい。

周囲の空気に敏感になり、敵がどの位置にいるのか手に取るように分かるといわれる千里眼の力。

やはりホルムは熟練のハンターなのだろう。モリスと並ぶほどのスラッシュアックスを剣の形にして引き抜くと、瞬時に巨大な刀身を横に構えて飛び出した。

水を蹴る足音に続き、落下したかのような勢いで巨体が現れる。

「ギャアアアアア！」

咆哮に身がすくんだ。

ライトはあわてて遅れたぶんをとりかえそうとランスを握り締め、咆哮にひるむことなく一撃目を繰り出しているホルムのもとへ急いだ。

放電を始めた黒のスラッシュアックスで切り上げ、リレオイアがひるんだ瞬間を狙って軽々と横に一閃、薙ぐ。

血を浴びても顔色ひとつ変えず、怒り狂ったりオレイアの反撃、鋭い鉤爪での攻撃を身を斜め前に転がすことで避けた。

その隙にライトはリレオイアの背後に回り、その無防備な背中を睨みつけると中段突きを繰り出す。

背中をえぐられたリレオイアは不意打ちに悲鳴をあげ、巨大な緑色の翼を数回羽ばたかせた。

「！…ライト！下がれ！」

「え…うわっ!？」
遅かった。

リレオイアは宙に舞い上がり、毒のあると呼ばれる尾をぐるんと縦に一回転させることでライトを吹き飛ばそうとしていた。
危ない。

身にくる衝撃を余地して目をぎゅっと閉じた。

「馬鹿かおめえ！ハンターが攻撃にびびって目え閉じてどうすんだ

よ！」

「え?...ひゃああ！」

聞き覚えのある声が聞こえ、乱暴に体を持ち上げられる。ゴオっと風を切るおとが聞こえてライトは恐る恐る目をあけた。

そこには片手で大剣を支えリオレイアの攻撃を止め、もう片方でライトを横抱きにしたバルガの姿。

空の王者の鎧は彼にふさわしい。

「ば、バルガ！なんでここに」

「落ちこぼれ一人行かせて死なれたら俺様の寝覚めが悪いから...だ！」

勢いをつけてリオレイアの巨体を押し返す。

驚いた。

確かにバルガの体格は大きなほうだが、まさか大型モンスターの攻撃を片手で止め、それを押し返すことができるとは知らなかった。

同期のはずなのにここまでの力の差。それを見せ付けられて愕然とする。

だが今はそれより、助けてくれたという嬉しさが勝った。

「余計な世話にや、俺が一人で大丈夫だ」

リオレイアの注意をひきつけ、ヒラリヒラリと身をかわしながらホルムがつぶやく。

よく舌をかまないものだ...とライトは妙なところに関心した。

「てめえ一人だから余計に心配だったんだろ。得体の知れねえ化け猫に、同期の処女が奪われたってなったら大問題だ」

「はっ、弱いくせに助っ人のつもりにや？あんたの助けなんて必要ないんだよ！」

カシャンっと刃のものでない音がスラッシュアックスから響いた。見ればホルムが、スラッシュアックスに取り付けられた例の角、その隣に添うように取り付けられているピンを押し込んだところだった。

刀身が光を放つ。

属性開放突きというやつだった。

ピンを押し込みながらスラッシュアックスを地面に突き刺し、それを支えにして体を持ち上げるとホルムは足でリオレイアの顎を蹴り上げ、さらされた白い喉笛に刃を埋め込んだ。

声にならない悲鳴があがる。

幾度か光が放たれ、最後に紫色の強烈な爆発が起こった。

「きゃあ！」

「ちっ！」

強烈な風圧にバルガが舌打ちして伏せ、抱えられていたライトも地面に伏せる形となった。

砂埃が消えたところに倒れている竜の姿が見える。

「や、やった？」

竜の隣では斧の状態に戻ったスラッシュアックスを放り出し、たっているホルムの姿がある。

リオレイアはぴくりとも動かない。

「やった…やったああああ！」

歓声を上げてライトは飛び跳ねた。

「…単純な奴だな。今回お前は何もしてねえだろ」

「いいの、見て学べたから！それに…みんなと一緒に狩ったってことに意味があるもん！」

へらへらと緩みっぱなしな顔を見て、これでいいのか？とバルガはため息をつく。

対照的にリオレイアにとどめをさしたホルムはスラッシュアックスを拾い上げ、背負うと興味が失せたようにリオレイアから視線をはずした。

そこに何も無いように。

勝利に喜ぶこともなく、淡々と作業を終えたような態度でリオレイアから離れ、水辺にある岩に腰を下ろした。

冷め切ったホルムの行動。

それに気づいたバルガは、少し眉をしかめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0670r/>

light and cat【MH3】

2011年10月8日09時40分発行